

日本人移住者をめぐる差別と偏見 —台湾における日本人移住者を事例に—
尾形美帆

目次

はじめに

第一章 これまでのレイシズム研究

- 1 レイシズムの定義と分析理論の変遷
- 2 レイシズムの表象
- 3 レイシズムにおける「当事者性」
- 4 レイシズムと社会構造—マジョリティと「白人性」

第二章 日本人移住者を取り巻く状況

- 1 日本人移住者の実態—海外移住する日本人の多様化
- 2 日本人移住者と「日本人性」
 - (1) マジョリティ性としての「日本人性」と「白人性」
 - (2) 「人種」意識の芽生えとアイデンティティのゆくえ
 - (3) 帰国者が日本社会で生きるということ

第三章 台湾における日本人移住者を取り巻く状況

- 1 台湾における日本人移住者の実態
- 2 インタビュー

おわりに

はじめに

グローバル化がますます進む現代先進社会の多くにおいて、旧植民地からの移民やその子孫の枠組みを超えて新たな移民が急増し、移住先への定住が進んでいる。また、国際結婚により生まれた人や海外からの帰国者など、当該国家の国籍を持ちつつも外国で生活をし、複数国家を行き来しながら生活する人も多くなっている。

日本も例外ではない。長年「単一民族神話」が語られてきた日本でも、年々外国人移住者数は増加し、また日本企業の海外進出も相まって、海外への移住者も増えている。日本社会では、多様性あるよりよい社会を目指すという文脈で多文化共生が掲げられているものの、政策レベルでも、人々の意識レベルでも、依然としてその実態は多文化共生といえる状況からは遠く、そこには外国人が差別的な場面に直面し苦悩するという現実が存在している。こうした現実を受け、レイシズムもイデオロギーや政治的側面だけでなく、被害者や標的にされた人間の視点から分析される必要があると考える。「問題なのは、屈辱や偏見、就職差別などの行為だけでなく、それが被害者に受け止められ、影響を及ぼす点なのである。レイシズムは人格形成に影響を与え、精神的な打撃や恐怖が長いと傷を残すこともある（Wievorka 1998=2007:5）」。これは多文化が共生しようとするプロセスにおいて誰もが意識しておくべきことだ。差別とは移民個人の内面的な部分にまで影響を及ぼしうる社会問題だからこそ、その根源や仕組みを突き止め、より人々がそれに意識を払うことで、自分ごと化し意識的になる必要がある。これからますます海外からの外国人移民が増え、また国外への移住者が増えることが必須な今日、レイシズムに端を発する差別や偏見は誰もが関わる関心事項であるはずだ。差別というのは個人的な感情レベルではなく、社会構造に規定されていて、その実態は見えづらく、自分がその中に組み込まれていることに気が付きづらい。本稿では、移民個人の人生と生活に大きな影響を与える差別の現状とその背景をさぐり、差別に関わる一個人としていかに差別の問題にアプローチするべきか考えていく。

第一章ではレイシズムにまつわる先行研究をとりあげる。その一部として「白人性」の議論にも触れたい。「白人性」研究では、社会的マジョリティはただ多数派であるだけでなく、社会構造によって「特権化」されている集団と考える。「特権化」されたマジョリティのもとでマイノリティは抑圧され、それが表象

すると差別や偏見となる。時には行動として表れ出るものだが、「差別はよろしくない」という考え方が社会通念化している今日、そういったマイノリティへの抑圧は、往々にして私たちの意識の中のみ存在し、分かりやすい形で表象しないこともしばしばだ。こうしたレイシズムを社会構造から捉え、その際にいかにしてマジョリティが「特権化」されているのかを可視化・問題化するのが「白人性」研究の狙いである。

第二章では、日本人移住者を取り巻く状況を分析する。第一に、海外移住をする日本人が多様化していることを示し、第二に、日本において「白人性」研究と平行して捉えられてきた「日本人性」の研究に言及する。「単一民族国家」神話が語られる日本で、日本人が「特権化」されている現状を社会構造から分析するのである。日本人がマジョリティとして私たちから見えないところで特権化されているとすると、付随してどのような事が起こるだろうか。その一つが、マイノリティが気づかないうちに排除されるという事態だ。気づかないうちに、マジョリティが特権化されているということは、逆に言えば、見えないところで特権化から漏れている人々がいるのである。第三に、海外移住をして外国社会でマイノリティとなる日本人を考察する。今日日本人の海外移住者は増えているが、マジョリティであり続けられる日本人性を担保された日本人が、日本人性のない海外の新しい社会に飛び込んだ場合、そこで彼らはマイノリティへと「転落」しうる。彼らは外国社会の中で、自分が「日本人であること」を意識するようになると同時に、その社会のマジョリティ-マイノリティ構造に気がつくようになるだろう。このようにマイノリティとして意識的かつ客観的に社会構造を捉えるプロセスには、社会に潜むレイシズム的な価値観にも触れる機会が溢れているであろう。本稿ではこうした日本人の海外移住者の意識がどう変化していくかを考察する。また、特に日本においては、現代移住者は、従来のように移住先に頼る場所のないまま経済的理由によりやむなく外国への移住を余儀なくされるケースよりも、海外転勤や国際結婚などの事情で海外に渡る人々が多い。彼らの大部分は、日本との繋がりを確保したまま様々な形で外国での生活をしている。そこで、第四として、彼らが移住生活の中で何を感じているのか、移住前後で何が変わって何は変わっていないのかを検討する。その中には、インターネットなど電子メディアの利用も加わって、母国日本との繋がりを保ったまま物理的な生活拠点を外国に移しただけという現象も多くみられ、そのいった移住者がどのように自らを捉えているのか、彼らの「アイ

デンティティ」を考えることで、それが対外的な「差別」の感情とどうつながるのかを考察する。

第三章では、台湾における日本人移住者に焦点を合わせる。台湾における日本人移住の実態を取り上げたのち、現在台湾に本格移住をして3年が経つという日本人の方のインタビューをまとめた。私自身、大学4年生の秋学期を割いて台湾へ留学をした経験も合わせ、自分でも感じていた台湾社会での暮らしをインタビューの中で確認し、言語化し、本稿の議論と繋げて分析する。

おわりに、こうした議論を通じて語るレイシズムそれ自体が常に私を含めた全ての個人に関わる問題であるということをふまえ、相手と対話的に向かい合う姿勢の重要さと難しさを改めて論じた。

第一章 これまでのレイシズム研究

1 レイシズムの定義と分析理論の変遷

レイシズムはあらゆる社会現象と同じように変化するものであるし、レイシズムを分析するための理論も変化する。レイシズムの表象の仕方やその認知のされ方、また社会の枠組み地域や社会、時代もレイシズムの表象に影響を与えるものとして変化してきた。そこで、まず、先行研究としてレイシズムの定義と分析理論を紹介する。なお、ここではレイシズムと人種主義は同義とする。

まず、アルベール・メンミ (Albert Memmi) は、「人種差別とは、現実、あるいは架空の差異に、一般的、決定的な価値付けをすることであり、この価値づけは、告発者が自分の攻撃を正当化するために、被害者を犠牲にして、自分の利益のために行うものである (Memmi [1982]1994=1996:4)」とした。この定義は、①現実の、あるいは架空の差異に、一般的な価値付けをすること、②この価値づけにより、価値づける者が自己の攻撃や特権を正当化すること (本来この正当化は誤りである)、③価値づけられた者を犠牲にすることという三要素から成り立っている。その上で、差異を指摘したり、否定したりすること自体は悪いことではなく、むしろ誰かに敵対し、自分の利益のためにそうした差異を利用することによって人種差別主義者、反人種差別主義者になるとしてい

る。さらに、人種差別には二重の浸食作用があるという。第一に、被差別者は、彼らが無価値な存在にしようとする諸制度や屈辱とによって執拗な攻撃にさらされ社会の周辺に追いやられてしまう。第二に、最悪なのは、「人種差別主義者の告発が犠牲者内で内在化してしまう (Memmi [1982]1994=1996:59)」ことだ。犠牲者は他人の提供する自画像を大なり小なり受け入れてしまうのである。しかしそれでも、人種差別主義者は論証を続け、自己弁護をし、攻撃することをやめない。つまり、差別する側は自己の正当化のために、他者との差異に価値付けを行い、それを自己の利益のために利用しようとし続けるのであり、差別される側は少なからずその攻撃的価値付けを内在化し続けるのである。結果的に、差別主義者は自分を防衛するために、他者を価値付けすることになる。もはや人種差別は「人種差別主義者の自己に与える免罪符 (Memmi [1982]1994=1996:172)」であり、差別される側も差別する側も納得することがない底なし沼の状態で、いわば人種差別主義者自身が「人種差別主義者の倫理的パラドックス (Memmi [1982]1994=1996:61)」に陥っているといえよう。

次に、レイシズムの理論の変遷だ。初期の科学的古典レイシズムから制度的レイシズムについては文化的レイシズムへと変遷していった。

第一に、「人種」は立証できると主張した科学的古典レイシズムだ。このレイシズムは、ミシェル・ヴィヴィオルカは、「ある人間集団を身体的特徴によって捉え、その特徴と集団成員の知的・精神的特徴を関連づけることであり、場合によってはそれに基づいてその集団を下に位置づけ、排除することである (Wievorka 1998=2007:15)」と定義する。この理論では、人間集団の本能と身体的特徴には本質的な差異が存在し、「人種」は立証できるものであると捉えられた。「人種」は身体・本能的特徴や文化的特徴と結びつけることで理論化できると考えられ、十八世紀末から十九世紀に入ってヨーロッパに浸透した。さらに、「人種」概念は歴史の流れとともに発展していった。「植民地化と帝国主義、他方にヨーロッパのネーションとナショナリズム—ヨーロッパの拡大とナショナル・アイデンティティの高揚—という二つの動きのなかで、人種の分類は推進され (Wievorka 1998=2007:26)」、その結果、「人種」概念は肌の色で定義される遠方の「人種」だけでなく、「国土」に存在する「人種」も分類の対象とされていった。

しかし、こうした古典的レイシズムは次第に批判されるようになり、「個人の

行動や優越などの能力と人種や身体的特徴を関連づけることは科学の否定だとする考え方が登場した (Wievorka 1998=2007:33)」。それまでの古典的レイシズムを否定した人物にノーベル医学賞受賞者のフランソワ・ジャコブ (François Jacob) がいる。彼は、生物学にとって「人種差別は何の価値ももたず、もはや絶え間なく変化する現実を固定化することにしかない。生命継承において、あらゆる個人は単一であり、個人を序列化することはできない。唯一の豊かさとは集団的なもので、多様性から成り立つ。その他のものはイデオロギーにすぎない (Wievorka 1998=2007:34-35)」と主張している。また、1960～70年代には「人種化」という概念が登場する。これは、ある集団が人種によって他集団を表象、認識、分類することを指す。他にも、遺伝学者たちは遺伝子研究により科学的根拠を示すことで「科学的」とれていた古典的レイシズムを否定した。すなわち、「同じ『人種』に属するとされる個人間に見られる遺伝子の差異は、異なる人種間に見られる差異と同じか、それ以上であり、したがって人種概念は遺伝学において何の意味ももたない (Wievorka 1998=2007:35)」と示したのである。こうして、もはや「人種」は生物学的根拠のない概念となった。

第二に、古典的レイシズムに代わり新しく唱えられたのは制度的レイシズムである。1967年、アメリカ黒人運動の二人の活動家、ストークリー・カーマイケル (Stokely Carmichael) とチャールズ・ハミルトン (Charles Hamilton) は、「レイシズムを、個人が公然と行う場合と制度において非公式に行われる場合の二種類に分類し、前者が明白であるのに対し、後者は表に出されないばかりか、究極的にはレイシズム行為を行為者の意図や意識から分離することを可能にするとした (Wievorka 1998=2007:37)」と論じる。この制度的レイシズムとは、人に気づかれられないようなメカニズムを通じて、個人を劣った位置につなぎとめるものと認識されている。つまり問題が存在するのは、社会の機能の内側であると捉え、社会構造がその社会において支配的なマジョリティをマジョリティたらしめていると主張するのである。

第三に、「新しいレイシズム」と捉えられたのが文化的レイシズムである。レイシズムを正当化する根拠が文化的差異を重視する方向に変化した。つまり、各民族や国民の共同体に現れる人間の性質を、優劣ではなく、差異として捉えるようになったということだ。例えば、移民の大量流入が国民の均質性を脅かすという感情に繋がるというように、対象となる集団の差異が、支配集団のアイデンティティに対する脅威となる点が強調されたのである。

2 レイシズムの表象

レイシズムは様々な形で現れる。ここでは、偏見、隔離、差別の三つをあげる。現実にはこれら三つは混ざりあって表象してくるものである。

第一に、レイシズムが最初に姿を表すものの一つが「偏見」だろう。たしかにレイシズムは、内部集団(帰属集団)が外部集団(他者集団)より優れているとみなし、「他者の差異を際立たせ、差別的な態度を促し、それを正当化するステレオタイプを生み出す恐れのある他者の表象に支えられている。こうした偏見は、他者との具体的な経験や体験に基づいた知識がまったくなくても存在しうるもの (Wievorka 1998=2007:71)」である。例えば、メディアによる報道や人から聞いた噂話などによっても生成されうるだろう。人種的偏見が形作られるプロセスには、一種の社会化の過程で生じるケースや自らの人種関係の経験から生じるケースがあげられる (Wievorka 1998=2007:71-75)。

ステレオタイプはカテゴリー化とセットで語られるが、それらはそもそも雑多な社会で生きる我々にとって社会を分かりやすく把握するために必要不可欠な知恵である。社会の中のあらゆるものを一つ一つ認知しては私たちの認知能力はどれだけあっても足りないだろう。そこで、無数のモノを何かしらの共通点によってカテゴライズすることで、一つ一つ認知する手間を省き、社会の中で生きやすくするのである。この意味で、ステレオタイプやカテゴライズ自体は悪いものでも良いものなく、むしろ私たち誰もが用いている手段なのである。そのステレオタイプが否定的なものであるとき、それが偏見となる。ステレオタイプとは他者への先入観であり、無意識的、受動的だ。こうした思考停止を招くステレオタイプが原因となってレイシズムが表象することがある。しかし、要注意なのは、たとえその態度があくまで個人主義的な価値観や政治など他の要素から生まれるものであっても、安易に人種差別的偏見のせいにしてしまいがちだという点である。さらに、民主主義におけるレイシズムをとりまくモラルの低下に関する指摘もある。現代社会においてレイシズムは絶対悪とされ、あからさまな人種差別的態度は社会的にタブーとされている。よって、たとえ本心では人種差別的思考が働いていたとしても、自己防衛のためにそれを隠し、他の口実を立てることも可能なのである。(Wievorka 1998=2007:77)

第二に、レイシズムが「隔離」という形で現れ出ることがある。つまり、人種隔離である。これは、ある集団が遠ざけられるプロセスと同時に、特定の個別空間、つまり飛び地やゲットーなどの領地に閉じ込められているという結果の双方を指す。差別する側と差別される側の差異化の手段だ。人種隔離は搾取や差別と同義ではなく、その反対に見えることもある。例えば、『『別々だが平等』というレイシストの表現は、特に南アフリカのアパルトヘイト支持者により使われた (Wievorka 1998=2007:76-77)』。

第三に、序列化の論理に基づくのが「差別」だ。被差別集団を排除するのではなく、人種を口実にして劣る扱いをする。人種差別もプロセスと結果を同時に指す点で、隔離と同じように両義的な概念であり、社会生活の領域で起きる可能性がある。またテレビや映画、広告などメディアにおける被差別集団の扱われ方にも差別は見られ、被差別集団の存在が忘れられたり、認識が不足していたり、きわめて否定的に報道される場合、またその反対にその集団の身体的特徴を協調し、美化する場合にも差別は表れる。さらに、偏見の場合と同様、建前としては民主主義によってレイシズムは批判され、法で禁止されているために、差別は多かれ少なかれ隠されており、そのために前述の制度的レイシズムの概念が構築され、見た目には主体の存在しない、絶対的なメカニズムが説明されている。見えない差別、目につきにくい差別は広く浸透しているのである (Wievorka 1998=2007:81-82)。

3 レイシズムにおける「当事者性」

レイシズムを語ることは、しばしばレイシズムを客観的に捉える第三者という立場を錯覚させる。しかし、レイシズムには「外部は存在しない (モーリス＝スズキ・鶴飼・酒井・李 2012)」という論点があり、これはレイシズムを語る上で認識しておくべき重要な点である。レイシズムに汚染されておらず、完全に潔白になれるような場所は、少なくとも私たちの歴史の地平にはなく、語り手自身も完全にレイシズムから解き放たれているわけではないということだ。社会では、しばしば「私はそうは思わないが...」「私はレイシストではないが、世間では...」というレイシズムの常套文句を耳にする。これはまさに、自分はレイシストではなく、レイシズムを肯定するような態度を取ったことなどない—

つまり自分はレイシズムの「外部」にいると思っていることの現れであると言えるだろう。

また、「日本はレイシズムの博物館のような国(モーリス＝スズキ 2012:209)」であると述べてられている。これは、日本において、レイシズムが自分事として実感をもって受け止められていない様子を表現している。実生活の中でレイシズムを意識しないために、自分をレイシズムの外側の存在だと決めつけてしまい、自分をレイシストだと考える可能性を無にしてしまっているのだ。また、酒井直樹は、人種主義には「下品」なものと「上品」なものがあると指摘し(酒井 2012:3-68)、世の中で一般的に悪とされる醜く残虐な思考や行為に現れる「下品」な人種主義からは私たちは距離を取ることができると述べている。しかし、自分たちがカモフラージュのかかった「上品」な人種主義と日々付き合いながら生活していることはなかなか意識されない。例えば、鈴木江理子は、東日本大震災の際に、日本メディアにより外国人の行動のセンセーショナルな報道がなされたことを指摘している。震災後になされた「『我々』が苦境に立たされているのにも関わらず、なぜ「彼ら」は日本を見捨てるのか」という報道は、外国人を国民とは異なる存在として、つまり「我々」とは異なる「彼ら」として捉えた認識の上に成立している。また、帰国報道とは対照的に、日本の危機を救うために協力する「献身的な外国人」の姿も、しばしばメディアで報道された。これらには、情報の発信側、受信側双方に「『外国人であるにも関わらず』という無意識が潜んでいる(鈴木 2012:19)」。つまり、この震災を機に、情報の発信側であるメディアと受け手双方において、それまで無意識の中に潜んでいた「我々日本人」と「彼ら外国人」という認識が表象したのである(鈴木 2012)。そういった二分化は、「上品」な人種差別の一端であろう。無意識の中で自分と他者を二分化してしまっている可能性を見つめることが「当事者性」を獲得していく第一歩だ。

レイシズムへの対抗策として、モーリス＝スズキは法制度の整備・教育・メディア・越境的な社会の連帯を提案している(モーリス＝スズキ 2012:87-91)。これは、レイシズムが人々の無意識の認識の上に成り立っているものだという考え方をよく示している。認識を変えることによって、私たちはレイシズムを身の回りにある問題だと認識し、それが異なるバックグラウンドを持った人々への態度も変えうるのである。アルベール・メンミも、実践的教訓として人種差別を自覚することの重要性を説いている。「他人の心の中だけでなく、われわ

れ自身の内部にも、個人的にも集団的にも存在している。他人の人種差別を告発するのは簡単であり、便利であり、さらに付け加えれば矛盾している。他者にはその攻撃性を放棄するよう求めながら、われわれ自身の攻撃性は手放さないことになるからだ。まずはわれわれの内にある人種差別主義を見抜き、われわれ自身の行動に現れている人種差別と闘うことが、他の人々の中にある人種差別の勢いをそぐのに、一番有効に働くかもしれない方法である (Memmi [1982]1994=1996:140)。」

4 レイシズムと社会構造 —マジョリティと「白人性」

移民差別を考える際、マジョリティ側を考察する一つの視点として「白人性」という論点がある。白人性研究は、1990年以降米国を中心に展開され、マジョリティとしての白人を「特権化」するのは社会構造であることを強調し、それを可視化・問題化しようとするものだ。(中島 2005: 9; 松尾 2005: 23) こうした「特権化」においては、無意識のうちに序列化と差異化を生み出すような人種差別的な発想を生み出す可能性が多分にあるだろう。「白人性」にまつわる先行研究を3つ紹介する。

研究の第一として、ガッサン・ハージ (Ghassan Hage) は白人優越主義的な「白人性」を幻想と捉えている。社会のマジョリティを「白人」とし、ナショナルな文化資本としての「白人性」を生まれつき持っている彼らは、自分がそのような地位に伴う特権を得るべき「貴族」であるかのような幻想を抱いている、とする。しかし実際には、グローバル化に伴う移民の増大によって、「白人」社会の多文化化が進み、そういった幻想を壊している。「白人」は移民の増大という不可避の現実に対応しきれず、多文化社会へと同化させるには壁が高い。彼らは、社会の中心主体を自分たち「白人」と考えるため、移民を自分たちの意志によって排除されたり持ち込まれたりする単なる客体にすぎないと捉えてしまう。一方で、彼らが移民を追い回すことで回復しようとしている空間は、実体のない情緒的空間である (Hage 1998=2003: ch1,2)。

第二の研究としては、白人はその社会的立ち位置から「印のない無標のカテゴリ」に分類されるというものがある。白人は、非白人のような印あるカテ

ゴリーに対して理想的「標準」として機能しており、その結果、白人は白人としての人種意識を感じる必要がなく、人種主義に対する責任を感じることもない。つまり、白人は印のないカテゴリーとして非カテゴリー化されているため、集団として定義されることはなく、個人として扱われる。しかし、一方でマークされていないというのはあくまで相対的な指標であって、差別を受ける周縁からみれば、その白人性とは明確にマークされているカテゴリーとすることができる。そして、その白人性さえも流動的である（藤川 2011: ch.3）。その上で、藤川は「白人性」を、人種に関わらず個人の持ちうる資質の一つとして捉えている。近代における差別は、もはや肌の色といった見た目による差別ではなく、この「白人性」を身に付けているか否かという視点で行われている、とする。藤川によると、「白人性」を身に付けた集団というのは、グローバル化の現代社会において非常に流動化しやすい自己のアイデンティティをマークする能力を巧みに利用できる人々のことをさす。つまり、人種に関わらずとも個人の能力によって人種的属性が意味を持たないと、当たりまえのように生活できる集団である。そうした「白人性」を身に付けていれば、人種に関わらずとも経済的・社会的に上層に立てる一方で、その能力をもたない人は本質主義的なアイデンティティに頼らざるを得なく社会の周縁に追いやられてしまいがちである。

第三に、松尾はフランケンバーグを引用しつつ「白人性とは、白人／非白人の差異のシステムによって形づくられるもので、白人が自分や他者や社会をみる視点、無徴で (unmarked) 名前のない (unnamed) 文化的な実践、人種的な特権という構造的に優位をなす位置などで構成されているもの（松尾 2010: 192）」と述べた。その上で、白人性研究は、人種関係を中心に白人性をどのように社会的構築され、いかに機能しているかについての解明をめざすのであると規定している。

第二章 日本人移住者を取り巻く状況

1 日本人移住者を取り巻く実態

—海外移住する日本人の多様化

そもそも「移民」とは、経済的理由により永住する人々という意味を含む語である。それとは違って最近増えているのが、「(一時) 移住者」である。日本から移住した人々の中の多様性に注目すると、19世紀から第二次戦争までに海を渡った日本人移民とその子孫はいわゆる「日系人」と呼ばれ、一般に日本人を先祖にもち、日本以外の国の永住権または市民権をもつ人々のことをさす。さらに戦後に日本から渡った人々は「移住者」と呼ばれる。それ以降、日本から移住をするグループには、「退職移住者」と「国際結婚の女性」また日本で作った資本をもって核家族で渡航し、ビジネスを営む「ビジネス移民」など、多様化している。こうした状況下で、言語という側面では、英語圏において日本人コミュニティに所属する日本人の中には、バイリンガル、英語がある程度話せる者、英語があまり話せない者の間で序列が生まれる傾向が強い。

現代の日本の移住者は、経済的にやむを得ず移住を余儀なくされる人々とは違い、一時移住者のように将来的に日本へ帰国ことを選択肢の一つとしている人々も多い。例えば、「より良い」「より自分に合った」人生を求めての日本人移民については、「佐藤真知子（1993）が『精神移民』（英語版では『ライフスタイル移民』）としてオーストラリアで、藤田結子（2008）が『文化移民』としてニューヨークとロンドンで、聞き取りや観察調査を行っている(加藤2009:62)」。いずれの「移民」も、渡航先に骨をうずめるほどの定住度はなく、物理的にも精神的にもいわば「日本に片足を突っ込んだまま」であることが伺われる。それに加え、今ではインターネットを利用すれば、すぐに日本のコミュニティと連絡がとれる。こうした「バーチャル・リアリティ」における疑似コミュニティが、「リアリティ」におけるコミュニティの希薄さを補ってくれると同時に、さらなる希薄化を促しているのである。

2 日本人移住者と「日本人性」

(1) マジョリティ性としての「日本人性」と「白人性」

「日本人性」とは、日本人であることの本質を解明しようとするものではなく、一見自明であるかのような「日本人であること」が、いかに社会的に構築されているかを問うものである。

松尾は、日本人性を以下の4点にまとめている。第一に、日本人性とは、国内外の他者との際のシステムのなかで社会的に構築されたもので、「外国人（非日本人）」ではないことによって定義される。通常、優位にあるのは日本人、劣位にあるのは非日本人という形で構成される。第二に、日本人性は、日本人が自ら自分や他者や社会をみる視点となっている。日本人性は、自分自身、外国人、それらの社会関係を捉える視点に大きな影響を与えており、あくまでマジョリティから見た社会像を描いているのである。つまり、日本人性のもとでは、マイノリティから見た社会像は描かず、マイノリティの声すら届かず、集団内の多様な声を沈黙させる方向で作用している。第三に、日本人性は、無徴化された（unmarked）不可視な（invisible）文化を形成する。認識にのぼらない日本文化は、一般的あるいは普遍的なものとして社会の規範を形成することになる。日本社会において、何が「普通」で、正しく、大切であるかは、社会の規範を形成する不可視な「日本人」の文化によって決定されるのである。つまり、誰もが意識しないうちにマジョリティが社会規範を作り上げ、同時にそれを作り上げる「日本人」という考え方自体が非常に曖昧なのである。第四に、日本人性は、日本人社会において構造的な特権をもつことを意味する。あるべき基準として暗黙の了解の形で正当化された日本社会のルールや規範は、知らず知らずのうちに、日本人と外国人の間で、就労、居住、医療、教育、福祉などにおいて大きな格差を生んでいるのである。以上のように、日本人性は日本人／非日本人の差異のシステムによって、日本人が自分や他者や社会を見る視点、無徴で名前のない文化的な実践、特権をもつ構造的な優位にある位置などを形成しているのである（松尾 2010:193-195）。例えば、日本の学校における日本人性の分析として、「日本の学校は日本文化を前提とした不可視な基準や規則の下で運営されており、外国人の子どもたちへの支援がある場合もその多様性についての考慮はほとんどなく、通常の実践に付加的な配慮がある程度である（松尾 2010:202）」とする。「ありふれた日常の教育実践に、日本人としての規範や特権が隠されているのである。したがって、目に見えない日本人という背負い袋を意識化し、自明とされているマジョリティの文化的な特権や規範を明るみに出すことで、学校の脱中心化を試みるのがまず必要だ（松尾 2010:205）」と説明する。

そのため、こうした日本人性が確保される日本社会においては、多文化の共生をめざすには、日本人性という概念を設定し、不可視な基準の下でこれまで

聞かれなかった他者の声に真摯に耳を傾けることで、その社会的な構築性を解明する作業が必要になってくるだろう。

このように、「日本人性」とはマジョリティ性としての「日本人」の社会的存在を表している。これをマジョリティ性としての「白人性」と比較すると、両者とも、自分自身の社会的立場が、社会構造に規定された一見見えづらい他者への差別・抑圧の上に成り立っているという点で共通している。マジョリティ性を語る上で、「白人性」と日本における「日本人性」とは同じ構造をしているのだ。

(2) 「人種」意識の芽生えとアイデンティティのゆくえ

ではこうした日本人性が構造化された場—つまり、日本人がマジョリティとして生活できる日本社会の環境—において日本人性を内在化した日本人永住者たちが、その日本人性が担保されない外国社会へと越境・移住する際に、各個人はそうした新しい社会構造の中で実践や意識のあり方はどう変化していくのだろうか。移住先社会における「白人性」と向かい合う中で「日本人性」がマイノリティ性に転換し、それによって彼らが「日本人性」をどのように自覚し、それにどのように対処していくのかそのプロセスを考察する。

藤田は渡米・渡英後、様々な要因が若者のアイデンティティに影響を及ぼす過程を、特に、人種・民族という視点から捉え、その中で思考の「人種化」が起こり、各個人が、日本人としてのアイデンティティを「交渉」（他者との対話的な相互作用を通して「自分が何ものであるかを」取り決めて行く）していくプロセスを説明している（藤田 2008）。移住をすると、人々は人種・民族のヒエラルキーや特定の人種・民族の優劣についてよく話すようになる。例えば、移民が多い都市で生活しているニューヨークで暮らす日本人は、白人至上主義を意識する一方で、黒人・ヒスパニック・アジア系の人々よりも日本人の方が優れていると考えることが多い。このように、白人がマジョリティである白人性によって構成される社会において各個人の思考が「人種化され」、受け入れ国の「人種」ヒエラルキーを内面化していくことにより、「日本人らしさ」の意味を再解釈するようになる。彼らは自己を定義し直し、自らが白人と他の日本で暮らして来たときに比べて「人種」の概念を頻繁に用いるようになる。それは

つまり、多様な人種・民族的バックグラウンドをもつ人々との相互作用を意識的に経験し、思考がより「人種化された」のである。

一般的に、自発的な移住者は自分自身を経済的・政治的・社会的利益を得るために移住した「外国人」「異邦人」とみなす傾向があるといわれている。そして、そういった利益は、差別や困難などの犠牲を払わなければ獲得できないと考える。このような移住者は自分の成功や失敗をアメリカ人の価値観に合わせずに母国の価値観で判断する。実際にニューヨークに渡った日本人のうちの数人も、ニューヨークではアングロサクソン文化が規範であり、これを基準にすると自己を高く売り込めないという理由で、自分の状況を母国の価値観で判断しようとしている。つまり、日本人性が通用しない社会において、逆に個人の資質としての日本人たる自分を構想しているといえよう。

さらに、アイデンティティを「交渉する」（＝他者との対話的な相互作用と相互関係を通して取り決めて行く）ときには、日本人の場合、「日本人」が国民・民族・人種のすべてのアイデンティティを兼ね備えているため、自分自身の「日本人らしさ」に意識が向けられる。そして、彼らは自分自身の直接的経験というよりも、日本人論的な枠組みの中で自己のアイデンティティを交渉する傾向がある。例えば、日本人はしばしば「時間を守る」「集団主義」「自己主張が弱い」「協調性に富む」「上下関係を重んじる」などといわれるが、彼らは、しばしばこうした「日本的な」文化規範に沿って考えて行動する自分たち自身を「再発見」し、「日本人らしさ」からの逃避は不可能だと思い始める。こうした「日本人らしさ」は日本人以外にも見られることでもあるに関わらず、である。ここで語られる「日本人らしさ」とは、すべての日本人にとって本質的なものではなく、むしろ日本で暮らしているときに無意識のうちに吸収していた言説であろう。海外へ移住した後、受け入れ国の主流社会に入っていくことが難しいとわかると、自分自身の「日本人らしさ」に誇りをもつようになっていった（藤田 2008:ch.2）。その「日本人らしさ」は自分自身の経験から生まれたものというより、今まで吸収してきた日本人論の言説に基づくものであり、それらは自ら繰り返し語り、また他者によって語られるうちに自己化されていく。

馬淵は、そもそも、こうした日本人論がもつ問題を指摘している。日本人はこうだ、日本社会はこうだと語られる時には、「本物あるいは真性のような日本人の存在が想定されている。と同時に、日本人以外の者は一般化された他者と

して括られ、日本人とは異なる人、異なる社会・文化・規範をもつ人として想定されて（馬淵 2010:127）」おり、著者はこうした見解を文化本質主義的として捉えて批判している。馬淵が述べる文化本質主義とは「各々の文化は、その文化をあらわす純正な要素をもっており、他の文化との間に何らかの明確な境界を持っているととらえる静態的な文化観」（馬淵 2010:174）のことであり、それが最も顕著な形で表れたもののひとつが、「日本人論」や「日本文化論」と呼ばれる言説であるというのである。そのため、日本人論が語られる場合、日本文化の外にあるものはあくまで「異文化」であり、その位置づけは「自文化」を脅かすものではないとされる。したがって、このような認識のもとで行われる異文化理解には摩擦は発生しにくい、もしくは想定されていないのである。こうした固定的な日本人論の価値観が社会に浸透している一方で、実際は文化と文化の間には明確な境界線がない上に、各文化の独自性は決して固定的で変化しにくいものではなく、常に他の文化との接触の中で変化する可能性を持っているものである。それにも関わらず、日本人論を唱えるこうした文化の捉え方が他の文化を「異文化」「多文化」と一歩引いて考える根源にあり、その結果「文化を脱構築してひとつの文化に内在する多様性を顕在化させる視点や、多様な文化間のさまざまな力関係を分析する視点（馬淵 2010:129）」が生まれにくいのである。

この日本人論に見られる日本のナショナル・アイデンティティは、『欧米と日本』＝『普遍と特殊』＝『中心と周縁』といった軸をもとに構築されてきたものである。世界の中で日本を規定しようと「日本人は〇〇である」というような言説をいくら用いたところで、それは自己に普遍的な価値や中心的な地位を与えることにはならず、むしろ意図せずして、世界のなかで日本が特殊であり周辺であるという言説を再生産することになる。これは、無意識に自らの中に「劣等感」を植え付けていることでもあり、周りに対する無意識の偏見の根源になっているとも考えられる（藤田 2003: ch.3）。

（3）帰国者が日本社会で生きるということ

このように、海外に渡り、日本人性がマイノリティ性に転換することによって、「日本人」は自らの日本人性を自覚し、改めて自己を規定していく。では、彼らが再び日本に戻って来たとき、そうしたプロセスはどのように働くのだら

うか。再び、マジョリティ性として意識されないものになり、日本社会におけるマジョリティによる抑圧に順応していくのだろうか。それとも、自己の日本人性をマジョリティ性とは別の個人的な特徴として捉え、日本社会における自分の新たな立ち位置を見出すのだろうか。そこで、海外から帰国した日本人を検証した先行研究を二つとりあげる。

第一に、前述の「日本社会におけるマジョリティによる制圧に順応していく」帰国後の移住者を取り上げたい。藤田は、ニューヨークとロンドンから帰国した成人日本人計15人を対象に、帰国後の移住先へのイメージに対する変化の有無と日本社会が多文化化することに対する意見を調査した。いずれも出発から5年以内に帰国した日本人で、精神的満足や「夢」のための活動をしながら、比較的短期間の外国滞在をした「一時移住者」だ。まず、帰国後に移住先に対して抱くイメージが移住前と変化したかどうかという点だが、それは滞在期間によりまちまちである。長く滞在し滞在先の社会や実情を知れば知る程、ステレオタイプされた以前から持っていたイメージから乖離するケースが多い。次に、そうした海外移住生活を踏まえた上で、日本社会が多文化社会化することに対する意見を調査したところ、帰国者たちは「多民族都市であるニューヨークまたはロンドンでの生活を『いい』経験」だと考えている（藤田 2008:225）。一方で、「その大半にとって、日本が『単一民族国家』であり、この後もそうあり続けるべきだ」という考えは渡米・渡英前とほとんど変わらない。むしろ、そういう『単一民族国家』である日本への愛着が強まっているようである（藤田 2008:225）。という。彼らの多くにとって、日本で暮らしている間は、日本社会は「同質的に」映っていた。また、メディアは移住先の現地の社会的・人種的差別について具体的な情報を十分に伝えられないため、彼らは現地に対してステレオタイプ化された「良いイメージ」だけをもち、「現地の社会的・人種的差別が自分自身に関わる問題だと思っていなかった（藤田 2008:231）」のである。しかし、移住後、予想外に現地の人種・民族関係のなかで「日本人」である自分自身が周縁化されたことで、目的のイメージと「現実」のギャップが強調されると共に、「同質的な」日本への愛着が深まったのだ。つまり、この場合、海外に転身して日本人性がマイノリティ性となったことで、「日本人であること」を再規定すると同時に、やはり日本人性がマジョリティ性となる社会に復帰することとそこで安定した立場を希望するというわけである。帰国後、彼らは日本

国内の人種・民族的多様性に気づくことはあっても、おそらく意識的に自らの日本人性を個別的な個性と捉え直し、自己を再定義することはないだろう。なぜならば、その必要がなくても個が保障されるのがマジョリティ性の担保されている日本社会なのだから、である。

第二に、前述の帰国後に「日本社会における自分の新たな立ち位置を見出そうと奮闘する帰国者を取り上げたい。渋谷の行ったいわゆる「帰国子女」研究を参考にする。渋谷はマナミというある一人の「帰国子女」の女性の進路選択過程を検証している。マナミは、父親の海外赴任をきっかけにアメリカへ渡り、小学5年生から中学2年生まで、アメリカの現地校と補習校で学び、その後日本へ帰国した経歴をもつ女性だ。大学2年生になった彼女が自分の胸の内を語る形で検証がなされている。彼女は、帰国後大学受験を経て、日本の某有名大学に入学した。その過程で周囲との関わりにおいて彼女がいか「帰国子女」という枠組みに過剰に捉われてきたか、それによっていかに苦しみ、逆に自らが「日本人」であることを求めて来たか、が語られている。例えば、周りの他者はマナミの高い英語力は「帰国子女だから」当然のものとして捉えがちである。しかし、彼女は渡米時には全く英語が分からなかったのであり、あくまで一般の日本人学生が日本で英語を努力するのと同じように努力して英語を身につけたのである。もちろん、彼女が学習努力できる環境に恵まれたからこそ努力することができ、結果的に英語力が上昇したとはいえよう。しかし、彼女の主観においては、少なくとも英語は努力して身につけたものなのである。実際、それにもかかわらず、「周囲は彼女の英語力を海外生活と安易に結びつけ、彼女の努力分を正当に評価しようとしなかった（渋谷 2005:73）」のだ。帰国子女であるという属性が邪魔をして、彼女個人の業績は周囲に正当に受け入れられないことがしばしばであり、彼女はそういった点に悔しさと窮屈さを感じていた。そうした中で、マナミは周囲に受け入れられたいという思いから、大学受験という手段をとった。帰国子女という枠組みをかき消す「受験」という場で競争に勝ち抜けばみんなに認めてもらえるという思いもあり、彼女は英語だけでなく他の教科をも必死に勉強し、有名大学に合格したという。そんな中で語られる彼女の「友達がない（渋谷 2005:77）」ということばには、彼女の孤独が見え隠れしている。彼女自身が『帰国子女』であることを許さず、『日本人』であることを求め、彼女自身を疎外していたのかもしれない（渋谷

2005:78)」。彼女は大学に合格した今、彼女は自らの将来に、「私にしかできないことをしたい」と語る。自らを周囲に認めてもらうため、また今まで正当な評価をしてくれなかった周囲を見返すために必死に取り組んだ大学受験だったが、その末に、彼女自身が「帰国子女」対「日本人」、「英語」対「国語」といった二項対立の中だけで自らを語り自分を位置づけていくことに限界と疑問を感じ始めた。だからこそ、日本の社会の中で「私にしかできないこと」を追求し、新たな自らの立ち位置を築こうとしているのである。(渋谷 2005)

第三章 台湾における日本人移住者を取り巻く状況

1 台湾における日本人移住者の実態

1990 年中期以降、これまでの在留邦人数が多い地域であった北米や西欧においてその数が減少傾向または横ばいにあるのとは対照的に、アジア地域に在留する日本人は増加している。現代のアジアにおける日本人については、主に日本企業の海外進出に伴う日本人派遣駐在員に大きく目が向けられてきた。ⁱ (今田・園田編 1995; 園田 2001) そのため、海外とりわけアジアの日本人については、主に日系企業の拡大とともに捉えられる傾向にあり、また駐在員やその家族はその現地での生活空間も意識も日本人社会の内部に留まっているというイメージが強くもたれて来た (金戸 2013: 134)。一方、台湾では、90 年代中期以降、台湾人と国際結婚に至り台湾に定住し就労する日本人男女や、拡大する大学教育とともにそこで職を得る日本人、また近年は脱駐在員の中高年の男性や起業をめざす者などが徐々に増え、日本と台湾双方の政府統計でも、こうしたカテゴリーに含まれる日本人の比率の高さが、日本企業の駐在員として現地に在留する日本人のそれよりも目立つようになっているⁱⁱ (金戸 2013: 133)。

こういった移住者のタイプの変遷の中で、日本人会のような旧来の日本人コミュニティに主体的にアクセスしていく者もいれば、逆に日系企業の駐在員やその家族でも、日本人会にはそれほど積極的に関わろうとしない者も見られるようになっているように、日本人社会との関わり方や日本人組織に見出す意義は一様ではなくなってきた。加えて、インターネットの普及によって、通り一遍の情報はインターネットで入手できる時代になっている。このことから、

新たに台頭してきた日本人組織も旧来の日本人組織も、単なる親睦や情報提供を超えた存在意義や活動が求められる段階に入っているといえる（金戸 2013:157）。

また、台湾社会はよく親日的だと言われ、一般的に日本人が訪れやすい場所と認識されている。実際台湾には「哈日族」ということばもあるほどで、このことばは日本の流行に熱狂する若者を指し、台湾における日本ブームを表している。「哈」というのは「好意とかあこがれといった意味を表す一方で、善し悪しを区別せずに流行をただ追いかけている、というニュアンス（謝 2001:115）」も含んでいることばである。いずれにせよ、台湾の民主化の流れの中で行われた1987年の戒厳令解除や1994年の日本のテレビ番組の全面正式解禁が鍵となり、「日本のマンガ、アニメ、トレンドードラマは、台湾の若者の強い関心を引く（謝 2001:114）」ようになったといわれている。そのため、戒厳令が解除され日本文化が解放された中で育てられた世代は、いわば、「日本の大衆文化育ち（謝 2001:47）」であり、それとともに台湾における親日的な表象もどんどん増えて来ている。

2 インタビュー

今回、現在台湾で本格的な移住生活を初めて3年になる日本人男性の誠さんに、インタビューに協力していただいた。

まず、誠さんが台湾に繋がりをもつようになった経緯を伺った。もともと北海道の民間企業に勤務していて、その事業の一環として2006年から3年間の海外駐在をすることになり台湾へやって来たという。これが初めての台湾訪問で、当時は台湾について何も知らない上に、中国語もまったく勉強したことがなかったそうだ。当時、その企業では外国人をターゲットにしたビジネス展開が大きな課題であり、それに対応するために台湾、台北の関連事務所に派遣されそうである。誠さんは、それまでほとんど海外での生活経験がなく、日々の生活の中で外国人と積極的に関わるような機会も一切なかったという。しかし、もともと「外に出てみたい」「違う場所に行くことが好きだったし興味があった」ということで、社内の海外駐在の枠が発表されたときには「ぜひ自分が！」と積極的に手をあげたそうだ。3年間の台北駐在中には、仕事の傍ら3年間語学学校へ通い中国語の習得に励む。今では他の台湾人と同じように問題なく中国

語を使いこなせるという。3年間の駐在期間が終わると、再び北海道へと戻り、そこで再び1年半勤めることになる。その1年半の間には、同じ業務の延長線として韓国・中国・シンガポールを始めアジア諸国への出張を繰り返し、生活の中で外国との繋がりをもつと感じる頻度も高くなった。しかし、1年半後、「やっぱり台湾が好きで、戻りたくなかった」ということで、台湾企業に転職し今は台北に移住して働いている。社内は誠さん以外全員台湾人で、もちろん仕事は全て中国語。そういった環境の中で、働きだして3年が経つ。台湾人に関しては、「最初に駐在にきたときに感じていた台湾人に対するイメージは特に変わってはいないけれど、移住してから時間が経つに連れてどんどん深く知っていったことが多い」そうである。

そんな誠さんに台湾の生活の中で、「日本人であること」を意識することはあるかどうかを伺ってみた。

「やっぱり日本人を意識する瞬間はあるよ。例えば、たまにはシャワーじゃなくて湯船に浸かりたいと思ったり、温泉にいても水着を着て温泉にはいるのは嫌だなと感じたり。特にもとからすごく几帳面なわけではないけれど、台湾にきてからは結構自分が清潔好きだと感じるようになったかな。台湾の家には普通日本の家のような玄関がないから、靴を脱ぐ場所が決まっていない。でも、自分は結構靴を脱ぐ場所をしっかりと決めたいと思ったりするんだよね。あと日本から離れているからか、『外から見た日本』を気にするようになった。日本にいるときよりも、日本のニュースとか政治・経済に関心をもつようになったし、オリンピックの日本開催が決まったときなんかはやっぱり人一倍嬉しかった。」

このように日常生活の意識の中で自分が「日本人であること」を感じる機会をよくあるという。その一方で周囲から「日本人なのに…」「日本人だから…」といったことばを投げかけられることはほとんどないそうだ。むしろ、誠さんは自分が台湾人の中にとけ込んで生活されていて、台湾にいる一般的な日本人と比べても自分自身がより「台湾人っぽい」と捉えており、周囲からもよくそう言われるそうである。

「中国語を話すときは自然と台湾人っぽく振る舞っているっていうのはあるか

もしれないね。台湾人はすごくオープンで、人との距離の取り方も日本と大分違う。台湾にもいかにも日本人らしい日本人っているけれど、その人たちと自分は大分違う。典型的な日本人って、仕事していても丁寧すぎたり、握手するよりも礼儀正しくずっと頭下げていたりする。それに日本人は結構つるむって言われているけど、自分は仲のいい日本人の友人と時々会うとか数ヶ月に一回の日本人の集まりにたまに顔出すくらいで、普段は付かず離れずの関係。それに、『日本人だから』といって何かを期待されたりすることも特にはないかな。あえて言えば、大家さんが日本人は部屋を綺麗に使ってくれるから、日本人に家を貸すのが好きだと言っているのを聞いたくらい（笑）」

日本人という意識を持って台湾で生活しながらも、より台湾により順応した感覚で日常生活を送っている様子が伺えた。その中で他の日本人移住者と自分自身を差別化して捉えている様子も伺えた。そんな誠さんに、台湾の生活の中で差別・偏見を感じることはあるかどうか質問を投げかけたところ、台湾と日本における「内」と「外」の意識、またそこから誠さん自身が感じる台湾人と日本人の意識については社会の違いが見えてきた。

「台湾の生活の中で、周りの台湾人から自分に対する差別や偏見を感じたことはない。日本人がすごく嫌いな台湾人もたまにはいるけれど、台湾人は基本的に日本人が好きだと思う。きっと台湾にいる日本人移住者で差別・偏見を感じる人は、台湾人に対しても差別・偏見の目を向けているんじゃないかな。台湾社会に入り込めば入り込むほど自分のことをよく見てくれるし、きちんとした考えがあって相手のことを分かっているらば正当な批判も許される環境だと感じる。でも、出稼ぎの東南アジア移民や大陸の中国人に対する偏見はすごく強い。

日本にいる時には、移民の存在なんてまったく意識に入らなかった。台湾は小さな国だから、社会も経済も人々も台湾の中だけでは完結しない。だから、『内（台湾）』と『外（外国）』の繋がりが日本より強いと思う。そういう点では、実感として、日本の方が差別・偏見は根強いと思う。日本人はやっぱり日本が単一民族国家だと思っている人が多いし、基本的に日本の中だけで全てが完結できてしまうから、日本で生活していると『内（日本）』と『外（外国）』を完全に分けて考えてしまいがち。その結果、日本人は排他的で島国意識が根強い、と多くの日本人が感じている。外国人も少ないから国内の国民性も均一

的で、なんとなくみんなが共有する空気が生まれて、『まわりがそうだから』という理由で周囲に気を使って自分も行動してしまったりする。そういうのがプレッシャーになって、疲れる。もし周りと違うことをしていると自分も気になるし、他の人が自分と違うことに敏感になりやすい。台湾では日本のように周囲を気にしすぎることはない。もちろん自分が外国人として台湾で生活しているから気楽に感じているだけで、台湾人自身には台湾社会の中でそういったしがらみがあると思う。でも程度の問題で、日本ほど深刻ではない。」

また、移住生活を終えて再び日本に帰国したら、日本の中の外国人コミュニティの存在が移住以前より気になるかどうかという質問に対しては、「たいして気にならないと思う。あえていうなら、自分の関心がある台湾人コミュニティがあれば気にするかもしれない」という。

「台湾人以外の移住者に対しては…普段接する機会がなければ特に意識はしないと思う。特に北海道だと自分の生活圏内で外国人を見かけないから、まったく意識しなくても生活できてしまうんだよね。もしかしたら前より少しは気になるかもしれないけれど…実際よくわからない。」

日本に外国人が増えて、日本が多文化化したらどうかという問に対しては、「日本に移住する上できちんとルールを守ってくれるならば大歓迎」という。台北でも日常生活の中で移住者の姿を見かける機会はあるが、あくまで台湾の生活様式は保たれている。日本の治安の良さやルールがきちんとしているところは日本の美点でもあり、そういった点に悪影響がないならば、どんどん外国人を受け入れるべきだというのが誠さんの意見だ。

今回のインタビューでは、台北の社会の中で誠さんご自身が、「日本人である」というアイデンティティを心の中に保ち、むしろ異国生活を通じてその意識が強まる中で、台湾社会ならではといえるような「オープン」な身のこなし方や他者との関わり方の感覚といったものにより順応して、いわゆる典型的だとされる日本人移住者の生活からは、物理的にも心理的にも離れたところで生活している様子を伺うことができた。台湾社会にある外国人移民に対する差別・偏見の目などを感じることもあっても、ご自身がその対象になることは全くない

という。むしろ「日本人だから」という枠組みを超えて、台湾社会にいるラベリングのされていない一人の〈他者〉として周囲に受け入れられている。このように台湾では台湾のやり方に順応している一方で、日本に帰国すれば無意識的に「日本らしい」とされる慣習に順応してしまい、台湾にいる時と同じように振る舞うことや考えることがしづらくなる。「みんながそうだから自分もそうする」というような「排他的」で「均一的」な日本社会の慣習をよく知っている以上、それを窮屈に感じることはあっても、基本的にはそういった慣習に自分自身を順応させてしまう、というところだろうか。

最後に、同じ大学の先輩でもあり、急な依頼にも関わらずインタビューに応じてくださった誠さんに心から感謝の意を伝えたい。

おわりに

今回の論文では、レイシズムが、序列化と差異化といった一定の社会的なカテゴリーから生まれる価値付けや認識によって形作られ、それが差別や偏見となって表象するプロセスを考察した。また、グローバリゼーションと共に人の移動がより活発になる中で、ホスト社会における社会構造がその社会のマジョリティを「特権化」し支えている点を白人性と日本人性の視点から考察した。その上で、台湾における日本人移住者が、マジョリティとしての日本人性が通用しない台湾という新天地においていかに社会の中で自己を規定し、そこからどのように差別や偏見、ひいては社会全体を見ているかに着目した。

現代社会における「差別」とはなかなか行為となって表に現れ出ることのない、非常につかみにくいものである。というのも、「差別はいけない」という分かりきった道徳が広まり、社会には自分が差別の文脈に関わりがあるかないかという単純な「差別—被差別」という二分法思考が根付いてしまった。現代における差別を知るために今必要なことは、そういった二分思考の思い込みを解消して、差別を“生きる手がかり”としてどう見直せるのかを考えることである。つまり、自分の生活の中で、今この瞬間自分がどのように相手を見ているか、そこにどんな差別的な考え方が潜んでいるのか考えてみようとする姿勢が必要なのである。また現代社会には「差別的日常」が存在する。差別的日常と

は、普段は慣れきってしまった「普通」に見える日常の中に実は差別的な文脈が含まれているということを意味している。「普通」の中にこそ差別的思考が含まれており、その「普通」を思い浮かべることができる自分自身も差別的思考の持ち主である可能性が十分にある。差別とは、自分にも大いに関係のある問題事項なのである。よって、そうした日常を読み解こうとする姿勢は、排除・差別問題の「当事者」は誰であるのかということを確認することでもある。その点において、「レイシズムに外部はない」—これは研究会の中で登場した非常に印象的な言葉であるが—排除や差別を<自分>と<他者>とのつながりという視点で見つめるうえで、<自分>が常に差別する可能性をもっている存在として捉えることは、必要な最初のステップであろう。差別する可能性とは、私たちが「普通」でありたいと思う感情や「普通であること」と考えるものの中に潜んでいる。そのため、そういった「普通」をつねに見直し、そこに含まれる差別の可能性に気がつかなければならない。

これが外国で日本人が経験することとなると、事態はより複雑になりうる。日本人がマジョリティとして受け入れられない社会構造をもつ社会においては、しばしば日本人移住者は受け入れ国の「人種」ヒエラルキーを内面化していくことにより、「日本人らしさ」の意味を再解釈し、他者をカテゴライズしていく。そこには、無意識のうちに序列化と差異化を生み出すような人種差別的な発想に陥る可能性が多分にあるだろう。

こうして差別を語る自分自身もそのジレンマからは決して逃れることができない。先入観や固定観念といったものと想像力とは全く異なるものである。固定観念は無意識の中に潜む思考停止の結晶と言えるかもしれない。一方想像力は、意識的でありそこから思考が続いていく能動的なものだ。差別は自分の固定観念の中に潜んでいる。「私は差別をしない」と考える人の中にも差別をしている可能性は十分潜んでいるのである。自分自身の固定観念に気がつき、自分が傷つくことを知ることだ。傷つくことを恐れなくて真摯になること、そして対話的な想像力をもって考察に望むことの難しさを感じつつも、その重要さを痛感する。

注

1 外務省「海外在留邦人数調査」によると、全世界に在留する日本人総数は2005年に初

めて100万人を超えた。とりわけアジア地域の在留日本人が全体に占める割合は、1992年の14.9%から2009年には26.7%への上昇し、欧米などの他地域に比較して増加傾向にある。なお、北米は1992年の41.3%から2009年には38.6%、西ヨーロッパは18.9%から16.0%、大洋州が4.1%から8.1%となっており、大洋州で微増している以外は一般的に微減傾向が見られている。(金戸 2013: 158)

註在 在台日本人の職業別分類について、内政部警政署「台閩地區居留 外僑統計—按國際及職業別九十九年(2010)」に依拠してみると、2010年現在、「外僑居留証」と呼ばれる滞在日数180日以上長期ビザ取得者が申請できる外国人登録証を所持する日本人12,056人(男性7,330人、女性4,726人)の職業別内訳では、①その他(3,472人)、②商業人員(2,197人)、③15歳未満の者(1,853人)、④家事(1,687人)、⑤就学(1,003人)、⑥エンジニア(678人)、⑦教師(640人)であり、「その他」が最も多い形となっている。男女別では、男性が、①その他(2,422人)、②商業人員(2,066人)、③15歳未満の者(948人)、④エンジニア(665人)、⑤就学(464人)、女性が、①家事(1,687人)、②その他(1,050人)、③就学(539人)、④教師(300人)、⑤商業人員(131人)となっている。このように、在台日本人の職業別分類で「その他」に分類される日本人の割合が最も多くなっているが、これは2005年時点の同統計でもすでに首位を占めていた2,395人よりも1,000人以上も増えている。男女別にみると、2005年時点では、「その他」に分類される日本人女性が463人、男性が1,932人であったことから、「その他」の分類における女性の比率がこの5年で2倍以上に増加している。さらに、男性においても、第2位の「商業人員」との差は小さいものの「その他」が最も多くなっている。(金戸 2013: 159)

参考文献

Albert Memmi, [1082] 1994 "Le racisme, Gallimard"

(=菊池昌実・白井成雄訳,1996,『人種差別』法政大学出版社.)

Michel Wievorka, 1998 "Le racisme, une introduction (La Découverte)"

(=森千香子訳,2007,『レイシズムの変貌—グローバル化がまねいた社会の人種化、文化の断片化』明石書店)

好井裕明,2009,『排除と差別の社会学』有斐閣選書

-
- Hage Ghassan, 1998, "White Nation: Fantasies of White Supremacy in a Multicultural Society" (=保莉実・塩原良和訳,2003,『ホワイト・ネイション——ネオ・ナショナリズム批判』平凡社)
- 藤川隆男,2011,『人種差別の世界史——白人性とは何か?』刀水書房
- 加藤恵津子,2009,『「自分探し」の移民たち—カナダ・バンクーバー、さまよう日本の若者』彩流社
- 松尾知明, 2005, 「『ホワイトネス研究』と『日本人性』——異文化間教育研究への新しい視座」 『異文化間教育』 22:15-26
- 中島智子, 2005, 「異文化間教育研究と『日本人性』」 『異文化間教育』 22: 2-14
- Frankenberg,R., 1993, "White Women, Race Matters: The Social Construction of Whiteness." Minneapolis: University of Minnesota Press.
- 渡戸一郎・井沢泰樹,2010,『多民族化社会・日本—<多文化共生>の社会的リアリティを問い直す』明石書店 <第8章>松尾知明『問い直される日本人性—白人性研究を手がかりに』
- 吉富志津代,2008,『多文化共生社会と外国人コミュニティの力——ゲッター化しない自助組織は存在するのか?』現代人文社、
- Keeley, Brian, 2010, "International migration : the human face of globalisation
- Les migrations internationales : le visage humain de la mondialisation”(=OECD 編、濱田久美子訳,2010,『よくわかる国際移民—グローバル化の人的側面』明石書店)
- 酒井直樹, 2012, 「レイシズム・スタディーズへの視座」 鶴飼哲・酒井直樹・テッサ・モーリス＝スズキ・李孝徳『レイシズム・スタディーズ序説』以文社, 3-68
- テッサ・モーリス＝スズキ,2012,「グローバル化されるレイシズム」 鶴飼哲・酒井直樹・テッサ・モーリス＝スズキ・李孝徳『レイシズム・スタディーズ序説』以文社,69-91
- 鶴飼哲・酒井直樹・テッサ・モーリス＝スズキ・李孝徳,2012,「新しいレイシズムと日本」 鶴飼哲・酒井直樹・テッサ・モーリス＝スズキ・李孝徳『レイシズム・スタディーズ序説』以文社,207-264
- 鈴木江理子,2012,『東日本大震災と外国人移住者たち』明石書店
- 塩原良和,2008,「多文化主義国家オーストラリア 日本人移住者の市民意識—白

-
- 人性・ミドルクス性・日本人性」関根政美・塩原良和『多文化交差世界の市民意識と政治社会秩序形成』慶應義塾大学出版会,143-161
- 馬淵仁,2010,『クリティーク多文化、異文化—文化の考え方を超克する』東信堂
- 渋谷真樹,2005,「ある『帰国子女』の進路選択過程からみる位置取りの政治—それをまなざす研究者のまなざしをまなざしつつ」佐藤郡衛・吉谷武志『ひとを分けるもの つなぐもの—異文化間教育からの挑戦』ナカニシヤ出版,61-90
- 藤田結子,2008,『文化移民—越境する日本の若者とメディア』新曜社
- 篠原ちえみ,2003,『移民のまちで暮らす—カナダマルチカルチャリズムの試み』社会評論社
- 金戸幸子,2013,『台湾における日本人コミュニティの現在』藤女子大学文学部紀要, 2013-02-10; 50; 133-166
- 今田高俊・園田茂人,1995,『アジアからの視線—日系企業で働く1万人から見た「日本」』東京大学出版会
- 園田茂人,2001,『日本企業アジアへ—国際社会学の冒険』有斐閣
- 土肥豊,2010,『台湾の日本人学校の現状と課題』大阪総合保育大学紀要,第5号, 2010-12-10; 153-172
- 熊野孝,2007,「日本人学校の現状と課題」佐藤郡衛『東アジア地域における海外子女教育の新展開に関する研究』11-19
- 謝雅梅,2001,『台湾論と日本論—日本に来たら見えてきた「台湾と日本」のこと』総合法令出版